

二俣町の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065930

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1. 二俣町の概要

西本 陽一

- 1. はじめに
- 2. 二俣町の概要

- 3. おわりに

1. はじめに

金沢大学人間社会学域文化人類学研究室は、2021（令和3）年度の調査実習を金沢市二俣町において実施した。本報告書は、参加者が執筆した報告によって構成されており、本研究室の調査実習報告書としては37冊目になる¹。

本調査実習の目的は、学生が文化人類学的な調査のやり方を学ぶとともに、日本の地域生活に対する理解を深めることである。学生たちは、聞き取りや参与観察をとおして、対象地域の暮らし全般について学び、報告するが、地域の問題解決や発展へ直接的な提言をおこなうまでには至っていない。

調査実習の対象地域の選択には、主にふたつの理由があった。第一に、はじめて現地調査をおこなう学生にとって取り組みやすい規模の地域であることである。これまでの実習指導の経験から、10人前後の学生がそれぞれにテーマを設定し、データを収集し、報告を書くためには、少なくとも100世帯以上の集落が望ましいことが分かっている。また、二俣町は伝統的に和紙づくり（紙すき）が盛んで、蓮如ゆかりの有名寺院が存在するほか、最近では各種の地域活性化活動にとり組んでおり、参加者がさまざまなテーマを見つけることが比較的に容易だと予想された。

さらに、1992（平成4）年度に本研究室は、二俣町を対象とした同様の実習をおこなっており、当時の資料や報告書が残っている²。この29年前のデータと今回新しく得られたデータとを比較しながら、29年間に大きく変化した二俣町の暮らしぶりについて記述し考察することは、地域社会の研究として興味深いことだと考えられた。

北陸の地域社会を対象とした文化人類学的な調査実習として本実習では、学生が対象地域の暮らしを総合的に理解し、既存の文献・資料やセンサスデータをできる限り参照し、その理解に則って、各自のテーマについて聞き取りや観察を通じた一次データを用いて理解を深めることを目指している。例年そのために本調査実習では、夏休みに一週間ほどおこなう集中現地調査（「本調査」と呼ぶ）の後半に至るまで、学生は特にテーマをしばらずに、まずは対象地域について全体的な理解を得るようにと指導してきた。

¹ これまでの報告書一覧については、巻末に挙げてある。

² 金沢大学文学部文化人類学研究室編（1993）。

しかし、最後の点について言えば、コロナウィルスの拡大に影響された本年度の調査実習は、いくつかの修正を迫られた。修正の一つは、本調査が不可能になった場合にそなえて、大学から 14 キロと近い二俣町を対象地域に設定したことである。集中的な聞き取りが出来ない場合には、学期中に何度も足を運んで聞き取りをおこなうことで、データ不足に対処しようと考えたのである³。

本報告書は全体としてひとつの総合的な地域調査報告書を目指しているが、本書の 2 章以下の部分では、各執筆者が特に关心をもったテーマについての報告しているため、それらが全体として二俣町についての網羅的・全体的な報告をなしてはいない。それを補うために本章では、対象地域についての概観を提供するとともに、2 章以下で展開される各論への導入となることを目指す。

2. 二俣町の概要

2.1 立地

二俣町は、金沢市東部の医王山に源をもつ田島川（たのしまがわ）と豊吉川（とよしがわ）が合流して森下川（もりもとがわ）⁴となる地点の谷沿いに列村状に形成された、世帯数 115 戸、人口 320 人（2020 年）の集落である⁵。二俣という地名は、ふたつの川が合流する地点に位置することによるとされる（『医王』1975: 9）。1993 年 3 月に発行された本研究室の実習報告書には、「三方を山に囲まれた狭隘な谷底に立地する山村という印象」（鹿野 1993: 1）が記されている。しかし現在では、交通の発達によって、孤立性の高い山村という二俣町の性格はなくなり、住民の生活圏は拡大している。金沢大学角間キャンパスから二俣町へ行くには、急カーブのない整備された主要地方道・金沢井波線を自動車で 10 分ほどである。その金沢井波線から少し内側に入った、豊吉川と田島川の両側に並ぶ家々と、山間に並ぶ長方形に圃場整備された棚田が⁶、二俣町の風景を形成している。

二俣町から田島川を上流へ向かえば田島町が、また豊吉川をさかのぼれば荒山町、奥新保町、砂子坂町があり、金腐川の最上流部には清水町が位置する。この 6 町（清水町・田島町・二俣町・荒山町・砂子坂町・奥新保町）が、金沢市立医王山小学校、同中学校（二俣町在）の「校下」（通学区）を形成し、医王山公民館の担当域でもある。

2.2 対象地域の特徴

二俣は、旧二俣村、医王山村では最大の集落であった。村役場をはじめとして、郵便

³ 本年度にどのように本調査実習を進めたかについては、「おわりに」において述べている。

⁴ 『医王』（1975: 8）のように「森本川」と記すこともある。

⁵ 二俣町会提供資料「令和 2 年度 班編成表（総会用）」による。なお『令和 2 年国勢調査速報集計市町地区別人口及び世帯数』では、「荒山町」「砂子坂町」「奥新保町」を加えた形で、二俣町の人口は 117 世帯、310 人（うち男性 152 人、女性 158 人）となっている。

⁶ 現在では、農業機械各種が使用可能である（T さん、男性、73 歳）。

局、警察官の駐在所がおかれていたように、浅川村成立後も単独の集落としては最大の世帯数を擁し、村に対して強い影響力をもっていた。現在でも、郵便局（二俣郵便局）、駐在所（金沢中警察署二俣駐在所）、医王山農村環境改善センター、消防分団（金沢市消防局金沢市第一消防団医王山分団）、NTT二俣電話交換所などの施設が、二俣町内に置かれている⁷。このように、二俣は、現在の校下を形成する諸集落の、行政の中心地としての性格を早くから備えていた。

2.3 行政単位の変化

二俣町は行政的には、藩政期から 1889（明治 22）年までは、二俣、奥新保、砂子坂の 3 集落をあわせて「二俣村」と称していた。二俣村は 1889 年に田島、荒山および戸室清水と南原（あわせて現在の清水町）の各村と合併して「医王山村」となり、二俣はその大字名となった。1907（明治 40）年には医王山村が「浅川村」の一部となり、さらに 1957（昭和 32）年に浅川村が金沢市に編入され、現在に至っている。金沢市編入時に、旧二俣村の二俣、奥新保、砂子坂は、それぞれに独自の町名をもつ町として分離した（『角川日本地名大辞典 17 石川県』1981: 789-90）。

2.4 交通⁸

二俣町をめぐる交通事情は、過去において幾多の変化と発展を経てきたが、その変化と発展は、人々の生活を大きく変える影響を与えてきた。

現在、二俣への公共交通機関として、二系統のバスがある。第一に、金沢駅～橋場町～鳴和～森本駅～古屋谷～加賀二俣～田の島を主な経路とする JR 西日本バスである⁹。第二には、金沢駅西口～若松～金沢大学中央～ぬく森の郷～福光駅前～井波を主な経路として、金沢井波線（県道 27 号線）を走る加越能バスである¹⁰。

二俣をめぐる道路交通は藩政時代から存在し、複数のルートがあったが、その重要性は道路の改良やバスや自家用車の発達によって変わってきた（鹿野 1993: 2-3）。戦後の画期としては、昭和 23（1948）年に「バスが来た」ことで、これにより二俣から金沢への通勤者が増え始めた（T さん、男性、73 歳）。これは二俣から市ノ瀬、古谷谷、森本を通り、金沢に至る道路を走る国鉄バスのことで、この二俣古屋谷線（県道 211 号線）は、少なくとも 1975（昭和 50）年ごろまでは、二俣と金沢とをつなぐ最重要道路であった（『医王』 1975: 158-9）。

⁷ その一方で、「とよよし旅館」（「坂本旅館」とも呼ばれる）は営業をやめており、1992 年度の実習の際には存在したガソリンスタンドもなくなっている。とよよし旅館にはかつて、富山からの薬売りたちが宿泊していたという。しかし、道路がよくなり自動車で来られるようになって、集落内に泊まる必要がなくなった（T さん、男性、73 歳）。

⁸ 交通については本書第 5 章も参照のこと。

⁹ ウェブサイト「医王山線 ジェイアール西日本バス」（非公式ファンサイト）

¹⁰ ウェブサイト「南砺・金沢線 加越能バス」（非公式ファンサイト）

一方、金沢井波線（県道 27 号線）は、1992（平成 4）年から改良事業が進められ、2013（平成 15）年に完了した。1993（平成 5）年に開始された金沢大学の角間へのキャンパス移転にともない、周辺地域の整備も開始されるとともに、同年に本線は、建設省から主要地方道の指定を受けている。現在、同路線は、石川県金沢市と富山県南砺市を結ぶ重要な道路となっており¹¹、かつてのように二俣の町中を通るのでなく、町の横を走っている。2013 年の「清水田島トンネル」開通後には、細い峠道はなくなり、大きな道幅の同線を、自動車が高速で走ることが出来るようになった。主要地方道である本線は冬場にも除雪が早く、二俣以外には途中に信号もなく、自動車交通量が多い（T さん、男性、73 歳）。

2.5 生業

日本の地域社会の生業を見る際には、それぞれの時代に、各世帯成員がどんな仕事に従事し、世帯単位としてどのように暮らしてきたかという視点から眺めることが重要である。高度経済成長期以降に、サラリーマンが主要な仕事となる以前には（また、多くの世帯では、以後も引き続き）、一つの世帯はいろいろな仕事に従事し、成員間で分業されていた。

このように複合的に種々の生業に携わるさまは、二俣でも同様であったが、時代ごとに、世帯が従事する種々の仕事の構成は、変化してきた。藩政期から明治の初め頃まで、二俣の人びとは、和紙づくり、米づくり、山に関わる仕事（製材や薪炭づくり）、宿場町としての仕事（荷運び、宿、店）を生業としていた。

中でも、藩の保護を受けた和紙づくりは、山間部に限られた耕作地しかもたなかつた二俣の米づくりを補っていた。安価な洋紙の普及によって衰退した今でも、和紙づくりは二俣を象徴する伝統文化として町づくりに活用されている。

しかし、和紙づくり、米づくり、山の仕事、宿場町としての仕事は、それぞれ時期こそ異なれ、遅くとも昭和 40 年代頃からは、すべて衰退に向かつた。そして、戦後の交通の発達（バス路線の始まり、自家用車の普及、道路開発）によって、二俣の人びとの移動範囲は拡大し、金沢での勤め仕事が、多くの世帯における主要な生業となってきた。

現在、成員に勤め人を有する世帯は、会社や役所での勤め仕事がその世帯の主要な生業となり、農業やその他の仕事が世帯の維持を補うものとなっていると考えられる。一方で、勤め仕事を退職した高齢者のみからなる世帯では、年金収入を中心として、農業やその他の仕事によって世帯経済が補われているようである。

2.6 教育

未就学児のための施設として「みづほ保育園」がある¹²。もともと静光寺のかつての

¹¹ ウィキペディア「石川県道・富山県道 27 号金沢井波線」

¹² 法的には福祉施設だが、ここでは教育施設として記述する。

表1 医王山小学校・医王山中学校的生徒数

	小学校 (人)	中学校 (人)	合計 (人)	備考
1990 平成2年	72	28	100	
1991 平成3年	65	33	98	
1992 平成4年	63	38	101	
1993 平成5年	64	37	101	
1994 平成6年	65	30	95	
1995 平成7年	58	32	90	
1996 平成8年	64	30	94	
1997 平成9年	66	30	96	
1998 平成10年	66	25	91	
1999 平成11年	61	32	93	
2000 平成12年	63	33	96	
2001 平成13年	60	33	93	
2002 平成14年	52	33	85	
2003 平成15年	45	33	78	
2004 平成16年	41	32	73	
2005 平成17年	34	27	61	
2006 平成18年	31	28	59	
2007 平成19年	33	25	58	
2008 平成20年	27	26	54	
2009 平成21年	-	-	-	
2010 平成22年	-	-	-	
2011 平成23年	-	-	-	
2012 平成24年	-	-	-	
2013 平成25年	26	20	46	5月1日基準
2014 平成26年	24	16	40	5月1日基準
2015 平成27年	21	17	38	5月1日基準
2016 平成28年	15	18	33	5月1日基準
2017 平成29年	17	27	46	5月1日基準
2018 平成30年	25	32	57	5月1日基準
2019 平成31年	31	35	66	5月1日基準
2020 令和2年	-	-	-	
2021 令和3年	55	34	89	4月7日基準

ウェブサイト「医王山小学校・医王山中学校」より筆者作成

現在では、金沢井波線（国道 27 号線）の整備によって、交通は格段に発達した。交通の発達にともなって、進学のために県外に出る者も多くなり、「東大に進学した者もいる」。進学のために県外に出た者の多くは、卒業後も地域に戻らないという（Tさん、男性、73歳）。

住職夫人が寺の本堂で保育所を開いていたのが、1966（昭和 41）年に保育園となり（森高 1993: 60）、さらに 1985（昭和 60）年には経営母体が「社会福祉法人医王山福祉会」となった。現在みずほ保育園は、保育士 4 人に対して児童定員 20 名で、自然の中での少人数制保育をうたい、地域外から多くの児童を集めている¹³。

小学校はまず、二俣に 1872（明治 5）年に設立され、次いで荒山、田島にも設立されたが、これらは 1898（明治 31）年までには、二俣のそれに統合されて医王山尋常小学校となり、現在の校下が成立した。1947 年には中学校が、小学校に併設された（『医王』1975: 53-7, 116-22）。

医王山小中学校は、平成 17（2005）年 12 月に「金沢市小規模特認校」に認定され、平成 29（2017）年頃より、校下外からの児童受け入れを本格化させている。小学校一年生の児童数は、平成 25（2013）年から平成 28（2016）年まで 1~2 名だったが、平成 29（2018）年には 5 名、平成 30（2018）年には 12 名、平成 31（令和元、2019）年には 9 名、令和 2（2020）年には 10 名とその効果が大きく現れている¹⁴。校下外からの児童の通学のためにマイクロバスによる送迎を実施するなど、大変な面も多いが、児童数増加はうれしいことだと公民館長（Tさん、男性、73歳）は話された。

¹³ ウェブサイト「みずほ保育園」

¹⁴ ウェブサイト「金沢市立医王山小学校・金沢市立医王山中学校」

2.7 神社と祭り¹⁵

二俣には「医王山神社」（いおうぜんじんじや）と「白山神社」（しらやまじんじや）の二つがある。医王山神社は、武甕槌命（たけみかづちのみこと）と伊弉那岐神（いざなぎしん）を祀り、川の東に位置して、「上出」「北島」を氏子としている。神社にのぼる120余りの石段は戸室石で築かれた立派なもので、石段の登り口にある「医王山神社」の文字は犬養毅のものである。一方、白山神社は薬師如来を祀り（その故に同社は「お薬師様」と呼ばれる）、川の西に位置して「下出」を氏子としている。昭和46（1971）年には、金沢市堂町の八幡神社から社屋を移築し、総工費2百万円をかけて新社殿を竣工した。

明治29（1896）年に神饌幣帛料供進神社となった医王山神社は、明治43（1910）年に当時無格社だった白山社を合併し、医王山神社と称するようになった。現在、両社とともに、小坂神社宮司の高井氏が宮司を務めている。二俣町内には、二つの神社の建物が存在するものの、神社庁の管理上は医王山神社が二俣町の神社となっている。

医王山神社のかつての祭礼は、旧暦2月15日に春祭り、旧暦8月15日に秋祭りがおこなわれていたが、明治初年にそれぞれ新暦の3月15日と9月15日に変わった。同様に白山神社もかつては旧暦2月8日に春祭り、旧暦8月8日に秋祭りをおこなっていたが、明治初年に3月15日と9月15日に変更になった。現在、二俣町では2つの神社ともに日を合わせて、3月15日に春祭り、9月15日に秋祭り、11月末の勤労感謝の日前後に新嘗祭をおこなっている。厄年（男42歳、女39歳）のお祓いは春祭りにおこなう。

春祭りには子供みこしが出る。みこし保存会が管理している。秋祭りの日に子供みこしは、町内を回るが、年ごとに医王山神社から出発したり、白山神社から出発したりと、順番を変えておこなわれる¹⁶。

白山神社に奉納されている黒と白の2つの獅子頭は、下出と北島の氏子との一部がいっしょになって寄進したものであるが、明治の末頃に話し合いの末、北出の氏子にも共有されるようになり、二俣全体のものとなった。昭和の初めまでは秋祭りの際に担ぎ出されて獅子舞なども奉納されていた。

2つの神社をもつ二俣では、かつては祭りの際にも氏子が2つに分かれて、対抗し合うような雰囲気だったという。現在では、住民の減少、祭りの他の娯楽の増加、住民生活が集落内にとどまらず広がったことなどから、このような地区同士の対抗意識はあまり見られなくなった¹⁷。

¹⁵ 本項の記述は、聞き取りと観察を除いて、『石川県河北郡誌』『医王』『金沢市二俣町』によっている。

¹⁶ 同様に、春祭り、秋祭り、新嘗祭も、先に神事をおこなう神社は、医王山小学校と白山神社が交互に替わる。

¹⁷ 祭りなどの対抗意識はほとんど見られなくなったようであるが、今でも上出、北島、下出で、住民の気質は違っていると言う人もある（Tさん、男性、73歳）。

2.8 寺院と仏教行事

二俣町には、いずれも真宗大谷派である2つの寺、本泉寺（ほんせんじ）と静光寺（じょうこうじ）が存在する。すべての檀家が二俣町内にあるわけではないが、明治初めには、本泉寺が495戸（明治11〔1878〕年）、静光寺が45戸（明治12〔1879〕年）の檀家を報告している（『加越能寺社由来 下巻』 1975: 246-7）。また、1992（平成4）年の両寺の門徒数は、本泉寺300戸（二俣町内に99戸）、静光寺63戸（うち二俣町内に20戸）となっている（大菅 1993: 100）。二寺はそれぞれ独立した寺院で、本寺と末寺といった関係ではなく、門徒も別々である。しかし、それぞれの寺の行事の際には、檀家所属と関係なく、二俣の人々は両方の寺に行く（本泉寺住職、男性、68歳；大菅 1993: 99）。

両寺の役員には、檀家代表（本泉寺のみ）、門徒総代、責任役員がある。また本泉寺には「六日会」「旅燈会」「一鈴会」という女性組織があったが、いまでは後の2つのみとなっている。3つは年代ごとに分かれた婦人グループだったが（大菅 1993: 105-6）、六日会の会員の多くが亡くなり、旅燈会の会員は現在70～80歳代、一鈴会の会員は50～60歳代になっているからである。

両寺に共通した主な年中行事には、修正会（しゅしょうえ）、永代経、在家の報恩講、寺の報恩講がある。修正会は元旦の朝におこなわれるお勤めである。永代経では、亡くなつた人々のためにお経をあげるが、故人の月命日によって、上旬、中旬、下旬に分けられる。永代経を、本泉寺は3月中旬、7月下旬、9月上旬に、静光寺は4月1～10日、6月21～30日、8月17～26日におこなう¹⁸。報恩講は親鸞聖人の命日にちなんでおこなわれる真宗の中心行事で、在家と寺での報恩講に分かれる。本泉寺では9月～12月に、静光寺では10月～12月に、僧が門徒の家を回ってお勤めをする。また本泉寺では11月4～6日、静光寺では11月16～18日に、寺での報恩講がおこなわれる¹⁹。

蓮如がかつて滞在し、蓮如の2人の子が寺主を務め、蓮如自身も3年間滞在したとされる本泉寺には、蓮如ゆかりの宝物や伝説が多く残されている。蓮如ゆかりの真宗寺院では、蓮如上人の命日（旧暦3月25日）前後に「蓮如忌」が催されるが、本泉寺の蓮如忌（現在4月24～26日に実施）は有名で、古くから記録や研究が残ってきた²⁰。

¹⁸ 8月は本来10～20日に行うべきだが、お盆があるので、17～26日にずらしている（静光寺住職、男性、79歳）。

¹⁹ ただし、令和3（2021）年には、コロナウィルスのために、それぞれ11月5、6日（金、土）と11月17、18日（水、木）と2日間に短縮しておこなわれ、お斎も出されなかつた。

²⁰ 本泉寺の蓮如忌を取り上げる研究の多くは、蓮如忌における日本の土着信仰と仏教信仰との混交に注目している。例えば、長岡博男（1957〔初出1939〕）、桜井徳太郎（1952、1955、1987）、伊藤曙覧（1962、1986、2002）、蒲池勢至（2013）。米村（1997）は、山遊びと蓮如忌の習合説に反対し、習合というより「組み換え」と捉えるべきだと主張している。一方、西山郷史（1990；2010）は、固有信仰と蓮如忌を結びつけることから距離を置いている。本泉寺の蓮如忌について記した一般書には、井上雪（2012〔初版1978〕）、蒲池勢至（2001）北國新聞編集局（1997）、和田重厚（2003）などがある。さらに、本泉寺の宝物や伝承について

また、8月14、15、16日には本泉寺で盂蘭盆会（お盆）がおこなわれるが、14日には本泉寺境内で盆踊りが、15日は「いやさか踊り」（石川県指定無形民俗文化財）が踊られる。

本泉寺では1960年前後から「日曜学校」が開かれ、集落の子供たちが学んでいたが、十年ほど前に（単純計算すれば、2011〔平成23〕年に）なくなったという（本泉寺住職、男性、68歳）。静光寺は1956年から未就学児の保育に貢献してきた。保育園認可の下りた現在では、別所に「みずほ保育園」となって事業が継続されている²¹。

2.9 地域活性化活動

聞き取りの際に、二俣の人びとからしばしば聞かれたのは、「若いものは、出て行ったら、もう帰ってこん」といった言葉であった。実際に、国勢調査データからは、人口の減少と高齢化が見てとれる²²。このような状況に対応すべく、町会を中心に二俣の人びとは、地域の活性化に取り組んでいる。

二俣町の地域活性化の取り組みは、以下の諸テーマを軸に進められている²³。

1) やさか踊り

いやさか踊りは昭和に入ってほとんど踊られなくなっていたが、昭和29（1954）年より二俣町の数人が復元の着手し、昭和33（1958）年の盆踊りで披露され、同年に金沢市の無形文化財に指定された。平成7（1995）年には石川県指定無形民俗文化財の指定を受けたほか、各種の賞を受賞している。現在ではお盆の時期の8月15日夜に本泉寺境内で踊られるほか、金沢百万石まつりなど各所の集会やイベントに出演している。その継承のために保存会の人々は、医王山小学校で生徒たちに教えている²⁴。

2) 紙すき（和紙制作）²⁵

明治の中頃から和紙生産は衰退していったものの、地域活性化において、和紙は二俣町の象徴となっている。和紙による地域活性化の取り組みにおいては、「二俣紙すきの里 古里館」、「二俣紙すきの里まつり」が中心的な活動だったが、前者は数年前に閉館した。二俣紙すきの里まつりは、1988年に始まり、2019年には第32回を数えた。2018年には、舞台イベントの他に町内各所で、紙すき体験、和紙作品展、紙の資料展、紙す

は「本泉寺 参詣の栄」、『石川県河北郡誌』、『医王』の他に、加能民俗の会編（1988）が詳しく、本泉寺の伝承を子供向けに紹介したものには、藤島秀隆（1981）、小倉学・藤島秀隆・辺見じゅん（1976）、加能昔話研究会編（1979）、金沢こども読書研究会編（1989）などがある。

²¹ ウェブサイト「みずほ保育園」

²² 二俣町の人口と世帯については、本書第2章を参照のこと。

²³ パンフレット「薬草もゆるいおうぜん」、ウェブサイト「第31回 二俣紙すきの里まつり」などを参考に分類した。

²⁴ 『医王』（1975: 192-4）、ウェブサイト「金沢市立医王山小学校・金沢市立医王山中学校」より。なお、いやさか踊りについては本書第9章を参照のこと。

²⁵ 和紙制作については本書第10章も参照のこと。

き実演、和紙販売、わら細工実演、医王山そばやいのしし汁などが提供されて多くの人を集めた。しかし、2020、21年には、コロナウィルスの影響によって、まつりは中止となつた。

この他、伝統工芸士でもある和紙職人 Sさん（男性、82歳）は、二俣の内外で幼稚園児から大学生まで、紙すき体験や講習を引き受けている。津幡高校はここ数年、Sさんの指導で、二俣和紙による卒業証書づくりおこなっている（『北陸中日新聞』2021年12月18日）。

3) 朝市

朝市みちづれは、「村おこしのために始めて、今年で16年目」（2005年開始）だという。金沢市農林水産局からの補助（平成15年度個性ある生きがいの村づくり支援事業）に加えてJAからもお金を借り、各メンバー30万円ほどの出資金により、建物を作った。現在は、年間を通して、毎週金土日の朝8時から12時まで開店し、野菜のほか二俣和紙などの工芸品も販売している。朝市のメンバーで公民館長でもある男性（Tさん、73歳）によると、高齢者が自分の畑で作った野菜や花を持ってきて朝市で売ることによって、はりあいになっている。朝市みちづれは、他の6つの朝市ともに「金沢山里朝市回廊連絡会」に参加している²⁶。

4) 地元の特産品

Kさん（男性、89歳）は、定年退職後に奥様と2人で、地元素材を使った加工食品店を始めた。主な商品は「蓮如だんご、医王萬頭、金時草佃煮、なつはぜジャム」であり、自店舗や二俣紙すきの里まつりの他、JAほがらか村、内灘道の駅、ぬく森の郷（南砺市）などで販売していた²⁷。

和紙作家でもあるSさん（男性、82歳）さんは、「医王草もちグループ」を作り、地元で昔から食べられていた「医王草もち」「医王かきもち」の他、地元産の米、餅、おこわ、味噌、梅干しなどを、朝市みちづれ、二俣紙すきの里まつりの他、各所に出張しての販売もおこなっている。

5) 蓮如ゆかりの地

本泉寺は、蓮如が一時滞在したことのある寺として、蓮如ゆかりの宝物や伝承を多く残している。かつて二俣町は、金沢と福光の間の宿場町として、また本泉寺の門前町として賑わった。本泉寺を中心とした具体的な地域活性化活動があるわけではないが、二俣紙すきの里まつりでは本泉寺はイベントの場所を提供している。二俣町町会が推進する「金沢市二俣町活性化ビジョン」では、「真宗念佛と紙すきの里」という言葉が、二俣町を表象する語として用いられている²⁸。

²⁶ ウェブサイト「いいね金沢 金沢山里朝市回廊連絡会」

²⁷ ウェブサイト「公益財団法人石川県産業創出支援機構（ISICO）/医王Y・Y食品」。

²⁸ ウェブサイト「二俣町へようこそ—紙すきの里 金沢市—「二俣和紙」紙すきの里・金沢市二俣町」

6) 特認校（医王山小中学校）

上述の通り、医王山小中学校は「特認校」として、医王山校下以外からも生徒を受け入れている。またみずほ保育園は、自然の中での教育をうたい、遠くからの園児も受け入れている。このようにしてこれらの学校は、医王山地区の生徒・園児の減少に対応しようとしている²⁹。

3. おわりに

以上、本実習調査の対象地域である二俣町について概観してきた。

二俣町は、かつての医王山村や浅川村の時代から、最多の戸数をもつ中心的な集落であるとともに、金沢と富山とを結ぶ宿場町であった。生業面でも、山村として農林業に携わるほか、和紙生産を中心とした手工業、宿場町として宿、店、運送業などの仕事に従事してきた。換言すれば、山村としての完結した世界と外部と結ばれる重要な地点としての二つの性格から、二俣町の生活は規定してきた。

しかし、戦後のバス路線開通に始まる交通の発達と伝統的な生業の衰退によって、二俣町では通勤による金沢での勤め仕事が増加してきた。特に、自家用車所有の増加と道路の発達によって、人びとの生活範囲は広がっている。これらの変化の中で二俣町の人びとの生活は、完結的な内部世界と外部世界との連絡とからなるかつての複合性から、金沢とより日常的なつながりをもった周辺集落という性格を強めているように見える。

以上のような枠組みの中で、2章以下では、二俣町の暮らしについて、より個別の観点から見てゆくことになる。しかし、6日間の短い本調査（集中現地調査）とその前後の補充調査で得られた情報は限られたものであり、お話をうかがう機会のなかつの方々も多く、私どもの力不足により、せつかくうかがつた貴重なお話の多くを報告書の中に記すことは出来なかった。何よりも学生の実習ということで調べる側の未熟さは言うまでもなく、本報告書の記述にも不正確、不十分な店が多くあると自覚している。ここにお詫びするとともに、関係各位の忌憚ないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

本報告書で示される聞き取り対象者の年齢は、2021年12月末日時点の満年齢である。登場する住民の方々のお名前には、イニシャルを用いた。

²⁹ ウェブサイト「金沢市立医王山小学校・金沢市立医王山中学校」